



# コロナと共に生きる

鈴木良典さん(前農水省生産振興審議官)の講演

## 潜在需要の顕在化で活路



鈴木良典さん

2020年は新型コロナウイルスで明け暮れようとしている。人の往来制限は経済の疲弊を招き、今後も続くとして、うんざりだが、逃

げられそうもない。10月22日につくは国際会議場で開かれた青果育種研究会(岩澤均会長)の研修・勉強会で前農水省生産振興審議官の鈴木良典さんは「ウィズコロナ時代の園芸作物と流通」と題して講演した。

8月に農水省を退職し現在は「専業主夫」をしているという鈴木さんは現役時代は加工・業務用野菜の振興に関わってきたこともあり、生活者としての視点を交えながらコロナと共に生きる野菜の流通について語った。減少傾向にある野菜の消費は、果ごもりで家庭料理が見直されて一時的に増えたが、感染の緩和

と共に再び加工食品に戻っている。輸入比率が高い加工食材の中で国内産の野菜はこのままではじり貧になる。

この状態を回避するには「市場と生産者は信頼関係を構築し、物流が途切れないリスク管理と、消費者が選択できる商品を提示することで潜在需要を顕在化させ、需要の維持、拡大を図る必要がある」と鈴木さんは強調した。

コロナ禍でイベント、贈答、外食、輸出、インバウンドの需要が激減した。中国産野菜の輸入や輸入に頼る農業資材・機械部品などを扱うサプライチェーンは混乱し、外国人技能実習生が入国できないことで、農家は労働力不足に陥った。

学校給食が停止し、外食産業は客足が途絶え、青果物は納品先を失った。また、料亭や宴会によく使われるワサビ、カボス、スタチや贈答、インバウンド需要が多かったマンゴーやメロンなどの高級食材も販路を奪われた。

茶は新茶イベントの中止、インバウンドの観光需要、輸出の低迷で在庫が増大し、一番茶の価格低下によって生産意欲の低下を招き、取扱額まで下がった。

需要は多少回復したものの、低迷は続いている。業界は冠婚葬祭によって支えられてきたが、最近では質素な家族葬が増え、先細りする需要に対して体質改善が迫られていたところをコロナ禍が追い打ちをかけた。

2月には中国野菜の輸入が滞り、輸入シェアの多いニンニクやタマネギは一時品薄になった。むきタマネギは中国に頼り切っていたために、システムに組み込んでいた業者が緩和すれば経済的効率

者は活用できない状態に陥った。飛行機の往来がストップしたことで受粉を促すハチや花粉の輸入が止まったが、いずれも大事には至らなかった。

政府はコロナ禍に伴う経済対策として需要の減少や体質改善、輸入から国産への切り替え促進事業などを実施している。しかし、国産への切り替えは容易ではない。事態が緩和すれば経済的効率

### 物日に頼る花業界

花の業界もコロナ禍で売り上げが激減した。春に向かい、卒業式、入学式などの需要を見込んでいたが、2月のイベント自粛要請、4月の緊急事態宣言で切り花の価格は激しく乱高下した。お彼岸や母の日などの物日で



性が必要とされ、元の状態に戻るには打ってつけな食材に帰ってしまうだろうが、今後も予想されるパデミックによって物がなくなることへの対応は必要だろう。リスクを分散して回避する方法を皆さんで話し合う必要があるのではないか。

### 家庭料理で野菜増加

一方、家庭用需要は増えた。外出を控え、巣ごもりせざるを得ない人々も家で料理を始めた。すべると日持ちする野菜の需要が増え、パスタや小麦が店頭から一時消えた。小麦の原材料は大量にあるのに、急激に増えた消費者向けの小分けした商品の供給が追い付かなかった。パスタは家庭でテレワークする母親にとって、学校に行けない子どものために昼食の支度をして、すぐ仕事に戻

### テレワークで花飾り

農林水産省は「花いっぱいプロジェクト」で花の需要拡大を支援している。コロナ時代の中で花の自宅で楽しみ方を提案に取り組んでいる。

### 持続可能な産地

コロナ時代、食品は加工にシフトしている。野菜も魅力ある商品づくりを怠ると食材の一部でしかなくなり、じり貧状態になる。

こうした事態を回避するために福島県にタマネギの皮むきを組み込んだ持続可能な周年出荷体制の産地づくりが進んでいる。また、輸入シェアの3割を占めるプロックコリの機械収穫を取り入れた加工・業務向け栽培法を検討、国内産地の形成に取組んでいる。